



# くらんぱ

第45号(平成27年2月)



会場：日本野菜ソムリエ協会名古屋支社



会場：ゴントラン シェリエ 渋谷店



会場：美相院門跡(京都)



会場：キッチンスタジオ [OSAKA DELICIOUS]

大分乾しいたけ食の伝道師 Team3(ト)による大分乾しいたけセミナー

## 目次

### ●声

- ・乾しいたけの明るい未来を開く……………1  
きのこグループ長 兎玉 秀市

### ●研究報告

- ・試験研究課題の概要……………2
- ・原木生しいたけ栽培における冬期の生産量向上技術に関する研究……………3

### ●研修報告

- ・長期研修報告……………6

### ●トピックス

- ・おめでとうございます!……………7

### ●人物紹介

- ……………7



# 乾シイタケの明るい未来を開く

大分県農林水産研究指導センター

林業研究部 きのこグループ長 児玉 秀市



平成26年4月の異動によりきのこグループ長を拝命しました児玉です。よろしくお願いいたします。

大分県の乾シイタケは、全国品評会において16年連続優勝を果たすなど質、量ともに全国一の生産を誇り中山間地域の生活を支えております。しかし福島第一原発の事故以来、市場価格が低迷し生産環境は非常に厳しい状況に置かれています。これは、原発事故による風評、食生活の多様化等による消費低迷が主たる要因であり、価格回復への対応も相手が見えづらく一点突破の対策は無く長期戦を余儀なくされております。しかしこの予兆は、原発事故以前から確実にありました。外食産業やレトルト食品の台頭と量販店の総菜の充実による国民の食生活の変化、乾シイタケの食味を知る年代の減少、また、数年前からギフトの需要も減少していましたが、これは乾シイタケが相手に喜んでもらえる魅力ある商品では無くなったことを表しております。これらのことを、やがて家庭消費の落ち込む前兆として捉え、消費拡大の先手を打つべきでしたが、戦略的な対応が遅れた点を反省しなければなりません。

これらのことを踏まえ、今後の取組をいくつか述べてみたいと思います。

1点目は、生産量の維持です。近年の原木伏込量はH22年の113千㎡をピークに漸減し、H26年は75千㎡まで減少しており、この傾向が続くと生産量はH28年を境に千㎡を割り込むことが予測されます。乾シイタケ生産の衰退は中山間地域の活力減退に直結することを思うと、毎年110千㎡以上を目標に関係者あげて努力する必要があります。そのためには先ず市場価格の安定が最優先となりますが、生産者の経営安定のために3,500円～4,000円/kgの価格に安定する流通の仕組み作りが急がれます。

2点目は、乾シイタケが安定して売れ続ける仕組み作りです。このためには消費宣伝のターゲットを絞り、それに応じた対策を講じる必要があります。例えば、「しいたけ料理セミナー」等の開催による大分しいたけのファン獲得が考えられます。料理愛好家に旨味や機能性の他に、生産者の苦勞や生産の喜びを伝え、また、

シイタケ栽培は循環型資源利用であり、料理に使うことが里山の自然を守り農山村のコミュニティを支える社会貢献にも繋がること等を強く訴え、消費者にシイタケの価値を刷り込むことが重要です。売れ続ける仕組み作りの最重要点は顧客の獲得はもちろんですが、顧客管理をしっかり行うことが基本になります。顧客管理を行うことで消費者のニーズを掴む事も可能であり、新たな商品企画のヒントも得られる訳であります。常に見込み客を育成し、新規顧客に結びつけ、既存顧客を囲い込む、この取り組みを滞りなく実践していくことが必要です。

3点目は、消費者目線に立った物作りです。これまで、乾シイタケは出荷すればそれなりに売れていく商品でしたが、これからは、顧客のニーズを叶える製品作りの視点が重要です。生産者団体は、捉えたニーズを生産者にフィードバックし、生産者はそれに応える製品を安定生産していくこととなります。乾椎茸品評会を通して鍛え、磨いた、大分県の優秀な生産者が持つ技術をここに活かしてこそ、品評会の真の価値が発揮されると言っても過言ではないと思います。

4点目は、試験研究と普及指導の更なる充実です。当きのこグループも設立以来26年が経過し、これまで水分管理によるほだ木作り、施設による良品作り、病害虫の防除、省エネ乾燥等、主に栽培技術を中心とした試験研究に取り組んで来ました。今後はこれらに加え、シイタケ等きのこ類の機能性成分や味覚の官能評価等、流通や消費拡大を見据えた新たな付加価値を創造する試験研究にも積極的に取り組んで参ります。また、普及指導については、試験成果の現場移転を加速し、生産現場との連携を更に強固にし、生産者所得の向上を第一義に生産振興に取り組みます。

最後に、乾シイタケを中心に本県のきのこ産業を取り巻く情勢は、非常に厳しい試練の時を迎えております。きのこグループの総力を挙げて、この難局突破に精進努力して参りたいと決意を新たにしております。今後とも当グループに対しまして関係者皆様の暖かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

## 表紙写真の紹介

平成25年度第3期大分乾しいたけ食の伝道師に認定され、野菜ソムリエやシェフとして活動されている6名の皆さんがTeam3(トリ)としてタッグを組み、平成26年5月から全国主要5都市で「大分乾しいたけセミナー」を開催しています。県や日本野菜ソムリエ協会のバックアップのもと、「日本一のなほ山師になろう会」の生産者や県産農協も参加協力し、炬学や料理教室を通して大分乾しいたけの魅力伝えており、年度末までに受講者数は11会場で約250名になる予定です。受講生の中には料理教室等を行っている指導者も多く、各々が地元に戻って同様のセミナーを開催することで、大分乾しいたけのファンが全国的に広がるのが期待されています。

## 試験研究課題の概要

平成26年度の試験研究課題の概要を紹介し、(その他に経常的試験業務があります)。

### 1. 原木乾シイタケの冬期発生技術の開発

温度条件等により低品質のシイタケが発生しやすい秋期中温性品種の栽培管理技術について試験研究を行い、前年度までの冬期の栽培管理技術とあわせて、中温性品種の冬期発生に関する総合的な栽培技術の確立を図ります。

### 2. 移動式散水施設を利用したほだ木育成技術の開発

簡易に持ち運びできる移動式散水施設の利用技術開発として、水分管理が必要なほだ木の初期活着及び蔓延の促進を図るための管理技術に関する試験研究を行います。



右: 播菌後散水(上)と降雨遮断(下)の菌伸長状況

### 3. 原木生シイタケ栽培における冬期の生産量向上技術に関する研究【新規】

生シイタケの需要期である冬期は、発生量が減少する傾向にあります。この時期の生産を安定させるための栽培技術の確立を図る試験研究を行っています。今年度からは、連続浸水の手法について、品種の適合性や管理技術について試験研究を行い、原木生シイタケ栽培における総合的な冬期発生技術の確立を目的とした試験研究を行います。

### 4. クヌギチップを利用した菌床シイタケ子実体発生操作技術に関する研究

大分県産クヌギの有効利用と県内で多く使用されている短期栽培用品種において、利用可能な栽培技術の確立を図るための試験研究を行います。

### 5. クヌギチップを利用した菌床キクラゲ栽培技術の確立

本県には豊富なクヌギ原木資源が存在していることから、クヌギチップによる菌床キクラゲ栽培技術の確立を目的として試験研究を行います。

### 6. 乾シイタケ栽培における効率的発生操作技術の開発【新規】

気象変動の影響により春子の発生が不安定になりやすい乾シイタケ用低温性品種は、中温性品種と比較して単位当たり収量が低いことが知られています。このため、水分管理や保温処理などを組み合わせた管理により、低温性品種の単収向上を図る栽培技術の確立のための試験研究を行います。

また、世界農業遺産に認定された国東半島宇佐地域では、低温性品種の栽培が多いことから、実証試験地を設け、研究成果の生産現場への早期普及・定着を図ります。

### 7. 有用きのご類の品種改良【継続新規】

暖冬及び本県の地域条件に適したシイタケ品種の開発を行います。また、ナメコについては、栽培期間を短縮できる品種の種苗登録の申請を行い、実用化に向けた取り組みとさらなる品種開発を行います。また、乾シイタケについては新たな育種目標として、有用成分の含有量などを視野に入れて研究開発を進めていきます。

### 8. きのご類栽培における害虫類の生態解明と防除技術の開発【新規】

シイタケの原木栽培において、ほだ木を食害し、シイタケ生産の現場で直接被害を与える害虫の「ハラアコブカミキリ」について、農薬を使わない総合的な防除技術の確立を図ります。

### 9. 農業用アシストスーツの現地実証試験【新規】

近年開発が進められている、ロボットスーツの生産現場における作業効果を検証し、実用化に向けた技術開発のための実証試験を行います。



左:アシストスーツ着用 右:作業効果の検証

# 原木生シイタケ栽培における 冬期の生産量向上技術に関する研究

## 1. はじめに

生シイタケは市場から周年出荷が求められていますが、原木栽培においては冬期に発生量が低下するとともに、発生期間が長期化してほだ木の有効利用が妨げられる傾向にあります。それに対して冬期に使用できる品種の選定や、低温下で発生させるための発生操作方法などが十分に解明されていません。この時期の安定生産技術の開発を目指して、使用品種、加温、抑制、寒ざらし、連続浸水等の手法とその効果を検討し、冬期の生産量を増加させることを目標として研究しました。

## 2. 寒ざらしの効果

### (1) 新ほだの寒ざらし試験

H22年2月中旬に市販の乾シイタケ用3品種を接種しました。森にく丸と菌興115についてはおがくず種菌を多植し(60個/本)、森こう太郎については木片種菌を通常数(20個/本)接種しました。接種後はセンター内水分管理用ビニールハウス(以下、ハウスとする)と人工ほだ場で育成管理を行いました(接種後の管理は、以下に記載する全ての試験において同様に行っています)。

H23年12月から浸水を実施し、浸水後は寒ざらしを行い、対照区として寒ざらしを行わない試験区を設けました。寒ざらしは浸水後に水を抜き、枠に入れたまま浸水槽に1週間置いて寒にさらしました。浸水後の管理は、寒ざらしの期間を除き発生、採取、次の浸水まで発生舎に収容して加温しました(温度は空調機を利用して10~20℃の変温管理、湿度は自動加湿器を利用して82%を保つように設定、浸水後の管理は、以下に記載する全ての試験において同様に行っています)。結果は、冬期1~3回目の浸水発生で比較しました。

その結果として、寒ざらしは有効であると判明しました。図1に菌興115における、寒ざらし区と対照区における発生量を示しました。

寒ざらし区は発生量が多いばかりでなく、シイタケが大型になるという傾向も見られました。ただし、森にく丸は対照区との差が少なかったため、使用品種の選定も重要であると考えられました。

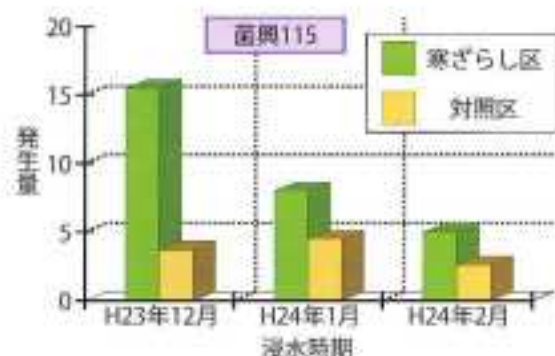


図1 寒ざらし区と対照区における発生量(kg/m<sup>2</sup>)

### (2) 古ほだの寒ざらし試験

ほだ木はH21年2月中旬に接種し、H22年1月と3月に浸水発生済みの古ほだを用いました。使用品種と接種数はH22年接種分と同様で、H23年12月から浸水を実施し、結果は冬期1~3回目の浸水発生で比較しました。

その結果として、古ほだにおいてはどの品種においても寒ざらし区の方がLサイズの個数が多いという結果になりました。

## 3. 事前加温の効果

H22年2月中旬に市販の生シイタケ用3品種(菌興702、森与さぶろう、セッコー201)の成型種菌をクスギ原木各々90本に接種しました(接種数は60個/本)。試験区は、浸水前1ヵ月間の温度条件で加温区、保温区、対照区を設け、各処理はH24年11月5日から12月4日まで行いました。結果は、1回目の浸水発生で比較しました。

表1 加温区、保温区、対照区における発生量(kg/m<sup>2</sup>)

品種名	加温区	保温区	対照区
セッコー201	10.1	3.6	4.6
森与さぶろう	11.7	4.1	4.5
菌興702	4.7	2.8	1.6

加温区: 発生舎に収容(空調機を利用して10~20℃の変温管理、実測で対照区+7℃、ほだ木乾燥防止に散水2hを2回実施)

保温区: ハウスに収容(実測で対照区+2℃、加温区と同様に散水実施)

対照区: 人工ほだ場に収容(外気温)

表1のように、どの品種においても加温区は対照区の2倍以上の発生が見られました。それに対して保温区は発生量が少ない傾向が見られました。加温区はシイタケの菌糸が活動を停止すると考えられる5℃以下に温度が下がることはなかったのに対して、保温区は83回（1時間毎の温度測定における回数）、対照区は113回、5℃以下に下がっていました。このことが発生量に影響を与えたと考えられます。

#### 4. 浸水開始時期による違い

H22年2月中旬に市販の生しいたけ用3品種（南興702、森夏さぶろう、セッコー201）の成熟種菌をクスギ原木各々105本に接種しました（接種数は60個/本）。試験区は、浸水開始時期別に1年目冬浸水区（H23年1月）、2年目秋浸水区（H23年10月）、2年目冬浸水区（H23年12月）を設け、結果は、1～3回日の浸水発生で比較しました。

表2 浸水開始時期別の発生量、個重、Lサイズの個数

品種	処理区	重量 (kg/m <sup>2</sup> )	パック数 (パック/本)	個重 (g)	L個数 (個)
セッコー201	1年目冬浸水	30.6	1.6	25.5	337
	2年目秋浸水	22.6	1.3	12.9	52
	2年目冬浸水	54.5	3.3	14.2	211
	平均	35.9	2.1	17.5	200
森夏さぶろう	1年目冬浸水	46.3	1.9	23.9	289
	2年目秋浸水	40.7	1.7	14.2	48
	2年目冬浸水	64.7	2.5	15.6	126
	平均	50.6	2.0	17.9	154
南興702	1年目冬浸水	36.5	1.8	21.4	202
	2年目秋浸水	23.6	0.9	12.5	56
	2年目冬浸水	36.4	2.3	13.0	114
	平均	32.2	1.5	15.6	124

表2から、どの品種においても2年目冬浸水開始区の方が発生量が多いが小型のシイタケが多くなり、1年目冬浸水開始区は発生量は多くないが、個重とLサイズの個数が多くなる傾向が見られました。

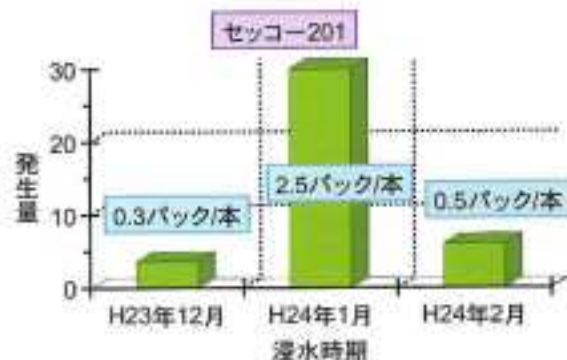


図2 冬期の各浸水時期における発生量 (kg/m<sup>2</sup>)

それぞれの品種において冬期3回の浸水における発生量を比較すると、2回日の浸水で最もよく発生し、1回日と3回日は少ない結果になりました。図2にセッコー201の例を示しましたが、1回日の発生が悪かったのは、事前加温等を行わなかったためと考えられます。

#### 5. 品種による違い

H23年2月中旬に市販の生しいたけ用8品種のおがくず種菌をクスギ原木各々35本に接種しました（接種数は20個/本）。ほだ木は、H24年11月5日から12月4日までハウスに収容し、12月5日に浸水を実施しました。浸水後から発生・採取後は発生舎に収容して加温し、1月17日、2月20日に浸水を行いました。

結果は表3（次頁）に、品種毎の冬期1～3回日の浸水発生、浸水前の自然発生別に発生量等を示しました。

##### (1) 浸水発生

発生個数は1,022～3,162個の範囲にあり、特に南興702が多く、富士F103、加藤 HM283がそれに続きました。

重量は16.2～38.3kg/m<sup>2</sup>の範囲にあり、個数と同様の傾向でした。南興702が最も多く、加藤 HM283、富士F103がそれに続きました。これらの品種のように、冬期において30kg/m<sup>2</sup>以上発生すれば十分であると思われます。

個重は12.1～17.7g/個の範囲にあり、加藤 M655、加藤 HM283、富士F206が重く、最も軽かったのは発生個数の多い南興702でした。

L級の個数は24～128個の範囲にあり、南興702、富士F206、森優実が多く、森夏実と富士F103は少ない傾向でした。

##### (2) 自然発生

自然発生では、品種によってかなりの違いが見られました。富士F206、富士F103、加藤 M655、加藤 HM283は個数、重量ともに多く、森優実、南興702は少なかったです。

個重は13.5～31.1g/個の範囲にあり、全般に浸水発生よりも重い傾向でした。特に加藤 M655、富士F103、富士F206が重く、軽かったのは森夏実、南興702でした。

L級の個数は36～412個の範囲にあり、加藤 M655、富士F206、富士F103が多く、森夏実、南興702は少なかったです。

**表3 品種毎の浸水発生（3回）、自然発生別の発生個数、重量、個重、Lサイズの個数**

発生形態	項目	201	702	HM283	M655	F103	F206	優実	夏実
浸水発生	個数(個/m <sup>2</sup> )	1,531	3,162	2,059	1,898	2,407	1,454	1,778	1,022
	重量(kg/m <sup>2</sup> )	21.3	38.3	36.2	33.5	34.0	24.8	29.4	16.2
	個重(g/個)	13.9	12.1	17.6	17.7	14.1	17.1	16.5	15.9
	L個数(個/m <sup>2</sup> )	75	128	80	75	25	97	82	24
自然発生	個数(個/m <sup>2</sup> )	933	804	1,785	1,797	2,173	2,270	800	1,027
	重量(kg/m <sup>2</sup> )	23.4	12.9	40.0	55.8	62.7	59.1	19.9	13.8
	個重(g/個)	25.1	16.1	22.4	31.1	28.9	26.0	24.9	13.5
	L個数(個/m <sup>2</sup> )	138	81	257	412	289	324	143	36

※品種は201：セッコー、702：菌興、HM283・M655：加藤、F103・F206：富士、優実・夏実：森

## 6. 連続浸水の効果

市販3品種を用いて連続浸水の効果についての予備試験を実施しました。供試ほだ木は、H24年2月下旬に市販の生シイタケ用3品種（菌興702、セッコー201、森夏実）のおがくず種菌と木片種菌をクスギ原木各々35本に接種しました（接種数は20個/本）。事前の保温や加温は行わず、連続浸水はH25年12月3日に浸水を実施し、採取終了後の12月20日に2回目の浸水、同じく採取終了後の1月28日に3回目の浸水を実施しました。また、通

常浸水は初回12月3日、2回目1月7日、3回目2月25日に実施しました。結果は、冬期1～3回目の浸水発生で比較し、表4に示しました。

表から分かるようにほとんどの処理区において、連続浸水の方が発生個数、重量ならびにLサイズの個数が多いという結果になりました。また、浸水方法が同じ場合、通常浸水数であれば種菌形状による差がないという結果も出ました。今後は、多植した場合の効果の検証などを実施したいと考えています。

**表4 冬期3回の浸水における種菌形状別、品種毎の発生個数、重量、平均個重、Lサイズの個数**

品種	種菌	浸水方法	個数(個/m <sup>2</sup> )	重量(kg/m <sup>2</sup> )	個重(g/個)	L個数(個/m <sup>2</sup> )
菌興702	木片種菌	連続浸水	1,283	23.7	18.5	154
		通常浸水	911	16.5	18.1	83
	おがくず種菌	連続浸水	924	17.2	18.6	115
		通常浸水	1,530	24.8	16.2	81
セッコー201	木片種菌	連続浸水	767	16.1	21.0	160
		通常浸水	447	9.3	20.9	81
	おがくず種菌	連続浸水	713	16.5	23.1	118
		通常浸水	128	2.7	21.2	25
森夏実	木片種菌	連続浸水	221	5.6	25.4	40
		通常浸水	168	3.3	19.4	16
	おがくず種菌	連続浸水	213	6.3	29.4	45
		通常浸水	101	3.0	29.9	19

## 7. まとめ

乾シイタケ用品種は、寒ざらしにより大型になる傾向があり、新ほだは発生量も増加します。また、低温性品種ほどこの傾向が強いと考えられました。

生シイタケ用品種は、事前加温により発生量が増加しますが、ハウス内保温は5℃以下に低下する頻度が高いので、ビニール被覆との併用等が必要と思われます。また、「大型のシイタケを採る」、「数

を多く採る」、「冬期以外の時期にも使用する」等の目的に合わせて浸水開始時期を変えたり、品種を選定する必要があります。

当試験はH26～28年も継続中で、連続浸水や様々な条件を変えて試験を行っていますので、現場からの要望がありましたらお知らせください。

(主任研究員 村上康明)

# 長期研修報告

平成26年9月1日から10月31日までの2ヶ月間、森林総合研究所九州支所（熊本市、以下森林総研）で長期間の研修を受けさせていただきました。

研修の目的は、シイタケやナメコの新品種の開発を行うための技術を習得することで、研修内容は基礎的な技術である単胞子分離等の交配技術やDNA解析を用いた優良品種の選抜技術について学びました。特にDNA解析については施設の整備や高度な技術が求められると思っていたため、きちんと技術を身につけられるか疑問でした。しかし、実際に研修を受けてみると無菌条件でない室内で分析が可能であり、実験機器を扱ったことのない私でもできる比較的簡単な操作手順でした。

この研修の中で、きのこグループが開発したシイタケ品種のDNA解析を行い、温度特性と季節発生型の関係を分析したので結果について報告します。

**★目的** シイタケの品種開発には、品種の特性を確認するために子実体の発生が不可欠となります。しかし、原本栽培で子実体を発生させるには1～2年を要するため、新品種の選抜には長期間を必要とします。この過程を短縮するためにDNA解析を用いれば、菌糸の状態から品種の特性を判断でき、選抜時間の短縮が図れます。今回はDNA解析技術を習得すること、DNA解析で判断した温度特性が栽培試験で判断した季節発生型と相関関係（低温品種と解析されたならば春発生型となるのか）があるかを確かめることで、DNA解析技術が実用的なものかを検討しました。

**★方法** 分析にはきのこグループで開発した春発生型4品種、秋春発生型4品種、市販の春発生型2品種、秋春発生型2品種のシイタケ品種を使用しました。この菌糸よりDNAを抽出し、プライマー（対応する温度特性のDNAを増幅させるもの）を用いて、PCR（DNAを増幅させる機械）により特定のDNAを増幅しました。PCRにかけたDNAは電気泳動装置（電気を流すことでDNAを移動させる機械）を用いて流し、バンド（プライマーに対応したDNAがあった場合に紫外線を照射すると見える線）の有無で温度特性を判定しました。

プライマーは森林総研で開発したものを使用し、低温の一部の品種を判定するものを1つと高温の一部の品種を判定するものを2つの計3つを利用しました。  
シイタケ菌糸のDNAが各プライマーに対応した

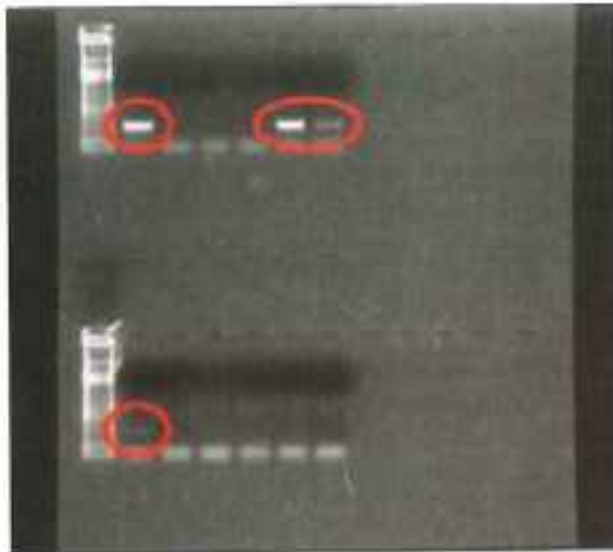
ものであった場合、電気泳動後にバンドが確認できるため、その品種の温度特性が判定できます。

**★結果** 今回の解析では、いくつかの品種で低温特性と高温特性のバンドが見られ、ある程度の温度特性は把握できました。しかし、どのプライマーにも対応しない品種もありました。また、秋春発生型の品種が低温特性を示すこともあれば、春発生型の品種が高温特性を示すこともありました。

残念ながら今回は、プライマーで判断した温度特性と季節発生型に明確な関係は見られませんでした。なかには春発生型の品種で低温特性を示す結果もいくつか見られました。きのこ類ではDNA解析を用いた選抜技術は研究が開始されたばかりであるため、まだ実用的な段階ではありません。しかし、技術が確立されれば品種開発速度は速くなり、県内で求められている特性を持った品種を速く提供できる可能性が高まります。そのために今後も森林総研と協力し、サンプルの提供等を通して解析精度の向上を図り、DNA解析がきのこの品種開発に実用的なものとなるように研究していきたいと思えます。

また、今回の研修で得られた技術を用いてシイタケやナメコの新品種の開発を行ってほしいと思いますので、今後とも生産者の皆さんの意見を寄せていただければと思います。

最後になりましたが、お忙しい中ご指導して頂いた森林総合研究所の職員の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。



赤丸が電気泳動後にバンドが出た品種  
(研究員 川口 真司)

おめでとうございます!

## 加藤 至誠 氏 (竹田市) 日本農林漁業振興会会長賞

平成25年度第52回農林水産祭の林産部門で、日本農林漁業振興会会長賞を受賞。永年の経験と確かな技術により高品質、高収量の乾しいたけ生産を行い、市場出荷の他に直接販売にも力を入れることで安定的な経営を实践。さらに視察・研修を受け入れることで生産者へ広く技術普及し、椎茸産業振興に寄与していることなどが高く評価されました。



加藤さん夫妻

## (有)やまなみきのこ産業 代表 坂本 憲治 氏 (九重町) 日本農林漁業振興会会長賞



坂本さん夫妻(両端)と広瀬大分県知事

平成26年度第53回農林水産祭の林産部門で、日本農林漁業振興会会長賞を受賞。栽培技術が確立されていないH元年から菌床生しいたけ生産を開始し、技術の確立と経営転換を達成。さらに共同出荷組織の設立、地元産クヌギの活用、加工品開発等地域連携の実践など地域貢献についても高く評価されました。

## 佐藤 英典 氏 (豊後大野市) 黄綬褒章

平成26年秋の褒賞において、クヌギ等原木林の積極的な造成や乾しいたけ生産における水分管理技術の普及等の永年の功績が認められ、黄綬褒章を受章されました。



佐藤さん(左)と橋本豊後大野市長

## 人物紹介

### きのこグループ長 児玉 秀市 佐伯市宇目町出身



林政課を皮切りに本庁や山先機関を経て、平成8年から4年、平成18年から5年、当グループに勤務し、今回は息巻振興局から三度目の返り咲きとなった。現役乾しいたけ生産者で、実践に基づく豊富な知識と経験を職員へ伝授するため、場所と時間を問わず熱弁をふるい、時には喫煙室もが議論の場と化す。大柄な体格から過去に例えられたのは「オオツガタケ」。このきのこは、深い味わいのある美味しさから名産の呼び声が高いが、熱くなると長くなる話もまた味わい深い。

### きのこチーム・主任研究員 彌田 涼子 福岡県福岡市出身



森林保全課を皮切りに西部、息巻各振興局を経て、中部振興局でしいたけ普及員を経験。きのこに対する思いが次第に強くなり、念願叶って研究員になった。現在、販路拡大の品質向上に重要なビニール被覆試験に取り組むとともに、農薬用アシストスーツの実証試験を担当し、原木栽培の軽労働化に向けた試験に力を注いでいる。家に帰れば5才の女兒の母。家事はご主人の協力を得てそつなくこなしているが、本音は家事用のアシストスーツ(?)が欲しいとのこと。きのこに例えると、食らい付いたら離れない「ヒメスッポンタケ」といったところか。

平成26年度「産直をなくする権利」優待作品

「えがおはね みんなをつなぐ まほうだよ」

佐伯市立蒲江小学校 2年 井川 拓

訃報 きのこグループ設立当初から在籍し、菌床生しいたけや育種の研究等を先導した主任研究員の野上友美氏が、平成26年5月1日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

大分県農林水産イノベーションセンター  
こころちゃん

編集・発行

大分県農林水産研究指導センター林業研究部きのこグループ

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町春嶽2369

TEL 0974(22)4236 FAX 0974(22)6850

印

刷

株式会社インタープリング